opusdei.org

# 愛すべき天地―この 世を熱烈に愛する

聖ホセマリアの説教、1967年 10月8日。

2009/08/29

皆さんが聞かれたのは聖霊降臨第二十一主日の厳かな聖書朗読です。神の言葉に耳を傾けた今、これから私がお話しする事柄、聖なる教会の子らに語りかける司祭の言葉の範囲をすでに分かってくださったことでしょう。超自然的になって欲しいと願いつつ述べる私の言葉が、神の偉

大さと人々への慈しみの数々を宣言し、今日ナバラ大学のキャンパスで祝う驚嘆すべき聖体の秘跡にあずかる準備に役立てばと思います。

今述べたことをしばし考えてくださ い。私たちが祝うのは聖体であり、 主の御体と御血の秘跡的な犠牲(いけ にえ)、キリスト教のすべての秘義を 結びつけ中心となる信仰の秘義(信仰 の神秘)なのです。ということは、神 の恩寵のおかげで、人間がこの世で できることの中でも、最も神聖で最 も超越的な行為をすることになりま す。主の御体と御血を拝領すると、 いわば今からこの世と時間の絆から 解き放たれて、天にまします神のそ ばにいることになります。天国で は、キリスト御自身が私たちの涙を 払ってくださり、死ももうなく、悲 しみも叫びも苦労もなくなる。古い 世界は過ぎ去っているはずだからで す。(1)

#### ゆがめられたキリスト教観

しかし、神学者が聖体の終末論的 (しゅうまつろんてき)意義(いぎ)と 呼び慣わしているこの慰めに満ちた 深遠(しんえん)な真理も、誤解され ることがあります。事実、キリスト 教的な生き方は、ただただく霊的な もの>つまり精神論として示されて きました。この世の卑しい事柄とは 交わらぬ < 純粋 > で特殊な人たち か、そうまで言わなくても、それら を精々現世で生きる間は霊に課せら れたものとして許容する人たちにふ さわしい生き方だと考えられてきた のです。

このような見方をすると、教会すなわちキリスト教的生活の場ということになってしまいます。キリスト信者とは、教会に通い、聖なる儀式にあずかり、一種の隔離された<世界>をなし、天国の控室と称される教会社会に浸りきった人のことで、そ

の外では世界が自分の道を進むというわけです。となれば、キリスト教の教えや恩寵の生活は、人間の歴史のあわただしい進展とは出会うことなく、ただその傍をかすめるように通り過ぎるだけです。

十月の朝を迎え、用意万端(ばんたん)整えて主の過越の記念にあずかる私たちは、このようにゆがめられたキリスト教観をきっぱりと否定はらいません。ほんのしばらいで考えてみましょう。そのは二つとない聖堂にいます後を飾る衝立(ついたて)は大学図書館、その反対側には新校舎建設中の機械類、上空に広がるナバラの空。

こう数えあげてみると、日常の生活 こそキリスト信者の本当の生活の場 であることが、絵を見るように明ら かになり、脳裏に焼き付くのではな いでしょうか。皆さん、兄弟である人々のいるところ、希望の実現をめざし、仕事に従事し、愛情を捧げるところ-これこそ皆さんが日々キリストと出会う所です。この世の最も物質的なものの真っ只中(まっただなか)こそ、神と人々に仕えつつ自らを聖化すべきところです。

私が聖書の言葉を使って常にお教え しているように、世界は良きもので す。それは神の御手から出たもの、 神の被造物であり、神なるヤーウェ がご覧になり、よしと思われたから です。(2) 良き世界を悪いもの醜 い(みにくい)ものとしたのは、人間 の罪と不信仰です。皆さん、決して 疑わないでください。この世に属す る皆さんのような男女が日常の正当 な諸現実から逃げるようなことがあ れば、それは神の御旨に反する生き 方です。

逆に、人間生活の社会的、物質的、 世俗的な仕事の<中>で、それらを <通して>神に仕えるよう招かれて いることを今、改めてはっきり理解 していただかなければなりません。 研究所や病院の手術室、兵舎や大学 の教壇、工場や作業場、田畑や家 庭、その他広範にわたるあらゆる種 類の仕事の中で、神は日々私たちを 待っておられます。ぜひ知っておい てください。ごくありふれた状況の 中に聖なること、神的なものが隠れ ています。そして、それを見付け出 すのは、私たち一人ひとりの責任な のです。

### キリスト教的物質主義

一九三十年頃・私のもとに来ていた 学生や労働者に、霊的生活を物質化 できなければならない、と教えてい ました。当時も今も頻繁に見られる 一種の二重生活への誘惑から守りた いと望んでいたのです。すなわち、 一方では、内的生活、神と関係を保 つ生活を営み、他方では、それとは 係わりない全く別の生活、現在の些 細な事柄に満ちた家庭生活や職業生 活、社会生活を営む誘惑です。

皆さん、二重生活は避けてくださり、これな生活を送るべきではありれる生活を送るでありたはないのでな生活を送ってしたないのです。あるです。なければいのでなる生活が神に満ちたものの生活が神に満ちたまでではなりません。そこの中なければなりません。そこの日ものはなりません。は、この中なければなりません。そこの日ものはなりません。そこの日ものはなりません。そこの日ものはなりません。そこの日ものはなります。

皆さん、平凡な日常生活の中で主に 出会うことができるか、いつまで 経っても出会わないか。これ以外に 道はありません。それゆえ私たちは 今、ごくありふれたものや状況に、 本来の高貴な意味を取り戻させ、神の国に役立たせ、霊的なものにする必要があると申せます。それには、全てをイエズス・キリストとの絶え間ない出会いの手段とし、機会にしなければなりません。

全ての体の復活を信仰告白する真の キリスト教は、物質的だというレッ テルを貼(は)られるのを恐れず、

「体から離れた純霊説」とは、当然ながらいつも対立してきました。そこで、霊魂には扉を閉ざす物質主義と真っ向から対立した「キリスト教的物質主義」とも称すべき立場を主張できると考えます。

昔の人が託身(受肉)されたみことばの足跡と称した秘跡は、私たちを聖化して天国へ連れていくために、神が選ばれた道をはっきリ示すものであることに疑いの余地はありません。おのおのの秘跡は、創造する力と贖う力をすべて備えた神の愛てあ

り、物質的な手段を使って私たちに与えられることもお分かりでしょっ。これから始まるユーカリスティア(聖体の祭儀)とは、贖い主の尊いとは、たと御血にほかなりません。私たちはそれを、最近の公会議が指摘のもたように「人間が栽培する自然のしたように「人間が栽培する自然のしまり」であるこの世の慎ましい材料、パンとぶどう酒という形で受けます。

「すべてあなたたちのものである。 しかし、あなたたちはキリストのであって、キリストは神のものであって、キリストは神の口ののある」(4)と、使徒聖パウロの書いたわけが分かるに注がれた聖霊からか。私たちの心に注がれた聖霊上がられるが、この栄光に向から上昇運動にでいるのです。そしているのではその動きの中にいるの中にいけいない方はその動きれていることを明らなにつけ飲むにつけばない。 け、何事をするにもすべて神の光栄 のために行なえ」、(5) とも書き 記しています。

#### 完璧な仕事

ご存じのように、聖書のこの教え は、オプス・デイの精神の核心をな すものです。この教えに従うなら、 仕事を完全にやり遂げ、日々の些細 なことがらに愛を込めることによっ て神と人を愛し、小さなことの中に 隠れている「聖なるものを」発見で きるようになるでしょう。こういう 意味で、あのカスティリーヤ地方の 詩人の言葉が見事に当てはまりま す。「ゆっくりと丁寧にやれば、良 い出来映えにつながる。| (ゆっく りと、丁寧に、何事であれ、成すだ けでなく、仕方が大事) (6)

皆さん、キリスト信者が重要性のないと思われる日常のことがらを愛を 込めて果すなら、それは神的な重要 性に満ちたものになると保証しま す。だから私は、キリスト信者の召し出しとは毎日の散文を英雄詩にすることだと幾度となく繰り返してきました。天と地は地平線で一つになるように見えます。しかし実はそうではない。天と地が本当に一つとなるは、日常生活を聖化しようとする皆さんの心の中なのです。

今、日常生活を聖化すると申しまし たが、私はその言葉の中にキリスト 信者の務めのすべてを含めていま す。無駄な夢を見たり、実現不可能 な理想を育んだり、空想を描いたり するのはやめましょう。私はこの種 のものに「夢想神秘」という名を付 けました。結婚していなかったら、 こんな仕事に就いていなかったら、 もっと健康に恵まれていたら、もっ と若かったら、もっと齢を重ねてい たら、等々。しかし、こんなことを 考えず、主がおられるところ、つま りもっと実質的でもっと身近な現実 に真剣な態度で携わってください。

復活されたイエズスは「私の手と足を見よ。私自身だ。触れて確かめよ。あなたたちの見ている私のこんな肉と骨は霊にはない」(7)と仰せになったではありませんか。

### 社会人としてのものの見方

今のべた真理から考えると、皆さん が生活しておられる世俗社会の沢山 の面に光を与えることができます。 たとえば、社会の一市民としての行 動について考えてみましょう。教会 や聖堂だけでなく、この世界こそキ リストとの出会いの場であると知る 人は、世界を愛するはずです。知的 にも専門的にも良い形成を受けるよ う努め、自分が活動する分野の諸問 題について、自由に自分の考えを育 む。その結果、独自の判断を下すで しょうが、それは、単に自分で考え るだけでなく、人生の大小さまざま なことがらの中に神の御旨を見つけ るために謙遜な努力をするキリスト

信者の判断になることでしょう。こ のようなキリスト信者であれば、自 分は教会を代表するために教会から 社会に下っているとか、自分の提案 する問題解決が「カトリックの解決 法 だとか、考えたり言ったりする ことはありません。およそあり得な いことです。万一そのようなことに なれば、それこそ聖職者主義、「官 僚的カトリシズム | とでも称すべき ものでしょう。呼び名は別にして も、物事の本質を著しく歪めること に変わりはありません。皆さんはあ らゆる所に本物の「社会人としての 物の考え方|を広めてくださなけれ ばなりません。それには三つの原則 があります。

- ・ 自分の言動について責任を負うという高潔な態度を維持すること。
- ・ 誰もが自由に意見を述べうる事柄 に関して、同じ信仰の兄弟が自分と は異なる解決法を提案したとき、彼

らを尊重できるキリスト信者である こと。

・人間的な派閥争いを母なる教会に 持ち込んだり、教会を自分の利益の ために利用したリせぬカトリック信 者であること。

私の言葉を文字通りに受けとってください。緊急の場合に限らず、 日々、自己の権利を行使せよとの呼び掛けです。また、政治や経済の分

### 社会人としてのキリスト信者

長年のあいだ繰り返してきたので改めて申し上げるまでもないとは思いますが、市民としての自由と共存(協調)・理解についての教えはオプス・デイが広める考え方の中心です。オプス・デイにおいてキリストに仕えたいと望む男女は、他の市民と同じく普通の社会人であり、真剣に責任

をもって自らキリスト者としての召 し出しを、その最後の結論に至るま で実行するよう努力を傾けている と、強調する必要はないでしょう。

私の子供たち(メンバー)と一般人と を区別するものは何もありません。 逆に、同じ信仰に生きるという点を 除けば、修道会や修道院に属する人 とは何らの共通点もありません。私 は、修道者を心から愛しています。 教会の聖性の別のしるしとしての修 道生活と修道者の使徒職、世間から の隔離(世を軽蔑する生き方)を敬 い、称賛しています。しかし私は修 道者になる召し出しを主から頂かな かったのですから、修道者としての 召し出しを望めば、無秩序としか言 いようがありません。いかなる権威 と言えども、私を修道者にすること はできません。いかなる権威も私に 結婚を強要できないのと同じです。 私は在俗司祭です。情熱をこめてこ

の世を愛しているイエス・キリスト の司祭なのです。

この哀れな罪人と一緒にキリストに つき従ったのはどのような人たちで しょう。まず、以前は信徒として専 門職や仕事に就いていたが今は司祭 として働くわずかの人々。ついで、 世界中の多くの司教区に属する在俗 司祭(教区司祭)がおり、彼らはオ プス・デイの聖十字架司祭会に属す ることによって各々の司教の従順と 教区の仕事の効果を確かなものとし ます。全ての人を心に受け入れる両 腕を十字架の形に広げ、私と同じよ うに町の中、この社会にいながら、 この世を愛する司祭です。そして、 多様の国籍、言語、民族からなる大 勢の男女信徒。彼らはそれぞれ自分 の専門職で生計をたてています。そ の大部分は結婚していますが、独身 者も多く、全員が人々と共に、もっ と人間的でもっと正義にかなった社 会を建設するという重大な課題に取

## オプス・デイの使徒職

一組織としてオプス・デイが進める 事業も在俗的な性格を顕著に備えて おり、教会そのものが推進する事業 ではありませんから、教会の位階(ヒ エラルキア)を代表したり、その代理 としての働きはしません。私たちの 事業は人間的福祉、文化、社会事業 であって、それらを福音の光で照ら し、キリストの愛で暖めるため努力 する市民が推し進めているものです。たとえば「聖霊によって任命された」(8) 司教方が将来の司祭を養成する教区神学校の運営はオプス・デイの使命ではありません。

一方、オプス・デイは、全世界で職業訓練所や農業技術訓練所、小中高等学校や大学など、多種多様の事業を進めています。私たちの使徒職面での熱意は、何年も前に書いたように、果てしない大海原(おおうなばら)のように広がるからです。

### ナバラ大学(スペイン)

ところで、皆さんが今ここにいらっしゃること自体、長々しい話よりりる 遥かに雄弁に本当の姿を語ってい話を わけですから、私がこれ以上の話を 続ける必要はないと思います。ナ 学友の会(後援会)の皆さんは かく はくの進歩に貢献しなければならか と自覚しておられます。皆さんからの心温まる激励や祈り、犠牲、寄

付は同じカトリックだからという理由で捧げられたのではありません。 ご協力は公益を心にかける市民としての自覚を明らかに示すものであるとともに、市民の力によって大学が生れ、維持されることを如実に示しています。

この大学が、日々より良く自由の発展や知的訓練の場、各分野の仕事の研鑽(けんさん)の場、大学教育への大きな刺激の中心となりましたの

も、ひとえに皆さんのご協力のおか げです。皆さんの惜しみない犠牲 は、学問の進歩と社会の発展、信仰 の知を追求する普遍的な事業の土台 になっています。今、私が申し上げ たことをナバラの人々ははっきりご 覧になっておられ、この大学が当地 の経済的発展、特に地域社会の発展 の主な要因であったことも周知の通 りです。人々の生活の中で大学が果 す役割を理解してくださったからこ そ、大学創設以来、ナバラの人たち が強力な援助の手を差し伸べてくだ さったことは明らかです。この支援 は日々高まり、広がっていかなけれ ばならないと考えています。

同時に、何らの利益も求めず、公益 に資するためにのみ全てを捧げ、国 家の現在と将来の繁栄に貢献せんと する事業が、国の援助を受けて負担 を軽くできる日の来ることを望んで います。この種の援助は現に各国で 与えられ、当然であると考えられています。

#### 人間の愛

結婚生活と家庭生活に向かう愛もまた、聖なる道、召し出し、すばらしい道、神へのまったき献身の道になるのです。すでに思い起していただいたように、全てを完壁にやりとげ、日々の小さなことがらに愛をこ

め、些細なことがらの中に隠れている「神的なもの」を見つけ出してください。これら全ては活力ある人間の愛のあるところで実現できるはずなのです。

ナバラ大学の教授と学生、職員の 方々ならご存じのように、私は皆さ んの愛を麗(うるわ)しい愛の御母・ 聖マリアに託しました。皆さんが捧 げる清くすばらしい愛と祈りを受け 入れて祝福してくださるよう、キャ ンパスに聖母小聖堂を信心をこめて 建立しました。「あなたたちの体 は、その内にある神から受けた聖霊 の神殿であって、自分のものではな いことを知らないのか。| (9) 何 度となく皆さんは、麗しい愛の聖母 像の前で、使徒聖パウロのこの質問 に喜びにあふれて答えることでしょ う。神の御母、知っております。あ なたの力強い御助けを得て、聖霊の 神殿にふさわしく生きたいと望んで いますと。

この感動を誘う事実を黙想するごとに観想的な祈りが湧き上がることのしょう。聖霊は物質にすぎぬ私のいではないではないではもう私のではない神を定ない神をもいて存在がを見己の体も霊魂もして「自己の体を帰せよ」(10)とこのである。そのである。そのである。というに生み出すことでしょう。

ところで、次の事実を忘れることはできません。すなわち、これまで申りてきた人間愛に関する黙想の中るとは、評価できる大はで、イエズスの独身にできるではが、イエズスの独身にできるでは、神のための独身とは、地上のです。それによって、体とのです。それによって、体とででを通さず、心を分かたずるのです。できるできるできるです。

そろそろ終らねばなりません。神の 偉大さと慈しみについて少しばかり 話すつもりでしたが、日常生活の望みについて話した今、私言うのはは せられたと考えます。と言うがは 世俗の現実の中で物静かに単常むの 実を愛する心で聖なる生活を営わい とこそ、世を救うため小止(こや)み なく働かれる神の深い慈しみ「神の 数々の不思議」(12)のもっと を打つ表れであるからです。

詩篇作者と一緒に、皆さんにお願いします。私の祈りと賛美に心を合せてください。「共に主を称(たた)えん。共に主の御名を崇(あが)めん。」(13)皆さん、信仰に従って生きましょう。

少し前に朗読されたエフェゾ人への 手紙の中で聖パウロが力づけていた ように、信仰の楯(たて)、救いの兜 (かぶと)を身に帯び、神の言葉であ る霊の剣(つるぎ)をとりたいもので す。 (14)

信仰はキリスト者にとってすこぶる 必要な徳ですが、教皇パウロ六合の 布告された「信仰の年」であるけれ には、特に必要です。信仰があるけれ ば、日々の生活を聖化するたから は、日々の生活を聖化になるから です。「信仰の神秘(聖体)」(15)に 近づく今、篤い信仰が要求され ます。神の慈しみの集約であ である主の過越にあずかるところだ からです。

皆さん、間もなく祭壇上で再び実現される「私たちの贖いの業」(16)を宣言するため信仰が必要です。クレド(使徒信経)を味わい、今この祭壇の上、この集いの中で実現するキリストの現存を身をもって体験するため信仰が必要です。キリストの現存をのおかげで、私たちは「心と霊を一つに」(17)して、一、聖、公、

使徒継承のローマ教会、つまり普遍 の教会となることができるのです。

愛する皆さん。最後にもう一つ、以上全てのことがらは儀式と言葉ではなく神的な現実であることを世界に示し、人々に日常生活は聖化され得ると証言するときも、やはり信仰が必要です。御父と御子と聖霊、聖母マリアの御名によって。

- 1 黙示録 21・4参照
- 2 創世の書1・7以下参照
- 3 第二ヴァチカン公会議「現代世界 憲章 | 38番
- 4 コリント1、3・22~23
- 5 コリント1、10・31

6 A.マチャード "Poesias completas" CLXI, 格言とうた」XXIV. Espasa-

Calpe. Madrid, 1940

7 ルカ 24・29

8 使徒行録 20:28

9 コリント1、6・19

10 コリント1、6・20

11 マテオ19・11参照

12 シラの書18・4

13 詩篇33・4

14 エフェゾ6・11以下

15 ティモテオ1、3・9

16 聖霊降臨後第九主日 ミサ密誦

17 使徒行録4·32

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/aisubekitenchi/ (2025/12/19)